［書評］

杉本貴代栄・須藤八千代　編

『私はソーシャルワーカー —福祉の現場で働く女性21人の仕事と生活—』

横山　豊治

ソーシャルワーカー像の明確化の必要性

杉本は、『ジェンダーで読む福祉社会』（1999．有斐閣）などの著書で知られるジェンダー研究の専門家であり、須藤は、『歩く日—私のフィールドノート—』（1995．ゆみる出版）で横浜市福祉事務所ケースワーカーとしての25年にわたる実践の日々を克明に著した実践家だが、ふたりとも本書を発行した時点では社会福祉士養成課程をもつ大学の教員となっており、この編者の他にソーシャルワーカーというアイデンティティを持ってそれぞれのフィールドで働く21人の女性が自身の仕事や生き方についてひとりずつ分担執筆している。

本書の冒頭で杉本は、大学でソーシャルワーカーを養成する教育を行なっていながら、入学してくる学生たちにソーシャルワーカーという仕事について理解してもらうことがとても難しく、具体的なイメージが漠然としている学生が多い—という悩みを明らかにしており、ソーシャルワーカーという仕事が一般的な生活者や学生にとって「見えにくい仕事」「見えざる専門職」となっていることを指摘し、職場や仕事の多様性が明確な職業像を結びにくくしているとも述べている。ここ10年ほどの間の福祉系大学・学部の増加は著しく、平均合格率が30％を切る難関の国家試験でありながら毎年１万人を超す合格者が生まれるほどに拡大した社会福祉士養成教育の現場に身を置く者の中には、そのように量的拡大を続ける一方で上述のように実際には極めて根本的な質的問題が横たわることにジレンマを感じ、この編者たちの悩みに共感を覚える者が少なくないであろう。

そこで、この多様で見えにくいソーシャルワーカー像を、何とか分かりやすく具体的に紹介しようとしたのが本書ということになるのだが、このような問題関心をかねてより同様に抱いて、「ソーシャルワークの伝達可能性」や「ソーシャルワーカー像の明確化」を研究課題としてきた評者にとっては、非常に注目すべき１冊の登場となった。それは、特に評者らの研究グループが本書に４ヶ月ほど先駆けて『成長するソーシャルワーカー　—11人のキャリアと人生—』（2003．筒井書房）を刊行してこのような作業の必要性を世に問うたばかりであり、手法は異なるものの極めて類似した問題意識に基づいてソーシャルワーカーの実践家像に迫ろうとしていることがわかったからである。そのような立場から、評者らの取り組みとの相違点にも触れつつ本書の特徴を述べてみたい。

学陽書房　228頁　2004年　本体価格2,300円

横山豊治　新潟医療福祉大学　社会福祉学部　社会福祉学科
［連絡先］〒950-3198 新潟市島見町1398番地
TEL・FAX：025-257-4470
E-mail：toyo@nuhw.ac.jp

本書の構成

編者の杉本が序章を、須藤が終章を担当し、その間に下記の通り、６つの章が組まれていて、各章に３～５名の執筆者が１節ずつ分担して各自の職歴や現在携わっている仕事、それを通じて培われた福祉観や職業観などを７～９頁でまとめている。

序　章　ソーシャルワーカーという仕事
第１章　行政機関とソーシャルワーカー
第２章　児童とソーシャルワーカー
第３章　暴力・家庭とソーシャルワーカー
第４章　高齢者・障害者とソーシャルワーカー
第５章　医療とソーシャルワーカー
第６章　国際社会・グローバル化する課題
終　章　ソーシャルワーカーという生き方

この中で登場する各執筆者の職名や肩書きは、固有名詞を省くと次の通りである。

市福祉事務所職員、都児童相談所児童福祉司、県保健所精神保健福祉相談員、児童虐待予防団体理事・相談員、スクールソーシャルワーカー、区役所児童館主事、市女性センター婦人相談員、母子生活支援施設施設長、都女性相談センター婦人相談員、ケアマネージャー、県社会福祉協議会ボランティアセンター職員、市身体障害者更生相談所職員、ＮＰＯ法人代表、精神障害者地域共同作業所所長、病院医療ソーシャルワーカー、精神科クリニックソーシャルワーカー、ＮＰＯ法人代表理事、福祉系大学助教授、エイズ予防団体リサーチレジデント。

本書の特徴と評価

１　ソーシャルワーカーの具体例を本人の記述によって示している

「社会福祉士の仕事」や「福祉の仕事」といったテーマで書かれている文献は多々あるものの、「ソーシャルワーカー」という表現を前面に出し、それにこだわって何種類かのソーシャルワーカー像を明らかにしようとしている文献となるとまだ意外に少ない。特に日常業務の様子が具体的に描かれており、それぞれが仕事を通じてどのような今日的な福祉問題に直面しているのかということもわかるようになっていることと、キャリア形成のプロセスや自身の仕事に対する職業観を披瀝しているものも多いということが読み手の関心を誘う。そうした“実話”を仮名や匿名でなく、所属も含めて実名で公表している点が評者らの共著『成長するソーシャルワーカー』と大きく異なる点である。そして、ここに登場する実践家は上記の肩書きの通り非常に多彩で、今日的な課題に最前線で取り組む者が多いが、スクールソーシャルワーカーやＮＰＯ役員のように社会福祉士制度が直接適用されていない職種が数多く含まれていて、社会福祉士の主要な実習教育や実践の場となっている特別養護老人ホームの生活相談員、知的障害者更生施設の指導員といった伝統的なレジデンシャル・ソーシャルワークの従事者に十分光が当てられていないという面がある。

２　女性ソーシャルワーカーに限定している

紹介されている21人のソーシャルワークが女性ばかりとなっているが、これには編者の意図があり、「はじめに」で杉本が女性に限定した理由を述べている。日本の社会福祉の現場がアメリカよりも性による違いを多く残しており、男女の執筆者を登場させることでその「多様性」はジェンダーを反映させることになると危惧したため―ということだが、この説明はややわか

りにくい。男女両方を取り上げるのは「次の課題」とも述べているが、日本のソーシャルワーカーや福祉系大学の学生における実際の男女比などを踏まえると、女性だけでこの職業像を描こうとするのはむしろ不自然な印象が否めない。

3　21人の仕事や生き方について総括的な検討や分析が加えられていない

序章、終章も他の章・節と同様に一編ずつ独立して書かれており、21通りのソーシャルワーカー像を提示しただけで、それらを通してのまとまった検討や分析が施されてはいない。この点は「職業アイデンティティ」「キャリアデザイン」「ライフコース」「生活史」といった研究枠組みを意識した評者らの取り組みと大きく異なる。

本書は研究書でなく啓蒙書を志向して編集されたといえるが、あえて女性に限定したならば「女性のキャリア形成」という視点でも考察を加えられるような事例が集積されていただけに惜しまれる。

ただ、須藤による終章では「ソーシャルワークとジェンダー」について米英日の社会福祉職発達史をふまえた持論が精力的に展開されており、ソーシャルワーク研究・教育の現状にも非常に挑戦的な問題提起がなされている。その内容には賛否両論が予想されるが、日本の社会福祉の多様な領域で実際に日々奮闘しているソーシャルワーカーたちの働きを反映しうるソーシャルワーカー像を確立するために、専門性を再考すべきであるという主張には深く共感を覚えるものである。終章の最初に紹介されたM.マクドゥーガルの言葉「専門職というのは、ひとつの生き方であって、たんなる仕事ではない」とともに―。